

『オリンピックに対する企業の取り組み ~巨大化と商業化~』

経緯

緯: 私たち Glocal Energy Transfer(以下 GET)は毎年、Exchange プログラムを行う相手国(スイス、ドイツ、香港、韓国)と共通のテーマを決め共同研究することを通して異文化理解を深めるという活動を行っている。一つのテーマについて他国の学生とともに学ぶということは大変貴重で意義深い経験だと考えている。GET2009 年のテーマは、「オリンピックに対する企業の取り組み~巨大化と商業化~」であった。2008 年開催される北京オリンピックへメンバー全員関心が高く、世界的な一大イベントであるので、相手国と問題関心を共有できるという点から「オリンピック」に注目した。日常的にテレビで見るオリンピックではなく、普段とは違った視点からオリンピックを捉えることを目指し、「企業とオリンピック」の関係にたどり着いた。顧問の先生からアドバイスをいただき、オリンピックの巨大化、商業化という文脈から、その関係を問いてみようとし、この「オリンピックに対する企業の取り組み~巨大化と商業化~」をテーマとして設定した。

内容

容: 巨大化とともに商業化を進めてきたオリンピックにおいて、企業との関係は切っても切れないものとなっている。オリンピックは企業とどのように結びつき、どのように相互作用し発展したのか、そして今後はどのように展開していくのかについて注目した。実際に個々の企業はオリンピックをどのように捉え、どのような効果を望んでいるのか、またどの程度オリンピック自体に関係することができるのか、将来的にどのような関係性を望んでいるかなどを調査した。また、相手国の企業、国民の反応を比較、検討することで Glocal にオリンピックを捉える試みであった。



オリンピック巨大化と商業化の流れ→
『オリンピックのすべて』
Jim Parry/Vassil Girginov 著 195 頁 表 8-2

1896年アテネ大会		1996年アトランタ大会	
大会比較			
5	開催日数	17	
9	競技数	26	
32	種目数	271	
13	参加国数	200	
311	参加選手数	10,000	
6万	チケット販売数	1,100万	
資金源比較			
67%	個人の寄付	---	
---	スポンサーシップ	32%	
---	テレビ放映権料	34%	
11%	チケット	26%	
---	ライセンス、小売など	8%	
22%	プログラム広告、切手	---	

目的

的: オリンピックという全世界的なイベントに関して、自分なりの Glocal な視点を養うこと。オリンピックと企業の関係について調べることで、オリンピック自体、企業の活動、企業社会への理解を深め、自分なりに最終的な評価を行うこと。オリンピック、企業の取り組みなど研究成果を社会に発信すること。オリンピックと企業の取り組みという共通テーマ、研究を通して相互の文化を知り、理解を深め、また自国の文化を客観的に捉えること。

GET2009研究活動

【企業・団体訪問】

●実際に企業や団体といったアクターがどのように考えているのかに焦点を当てたので、実際に企業や団体を訪問し聞き取り調査を行うことに重点を置いた。以下が訪問した企業・団体のリストである。

- ・(株)読売新聞社 JOC パートナー 2008年7月2日訪問
- ・三原 朝彦衆議院議員「北京オリンピックを支援する議員の会」所属 2008年7月8日訪問
- ・(株)日本マクドナルド TOP パートナー 2008年7月9日訪問
- ・NTT docomo JOC パートナー 2008年7月15日訪問
- ・東京オリンピック招致委員会 2016年オリンピック招致を担当 2008年7月16日訪問
- ・JOC(日本オリンピック委員会) 渉外部長を一橋大学にお招き 2008年11月14日実施

【文献輪読】

●企業や団体を訪問する前にオリンピックに関する知識を得ることとオリンピック自体を包括的に勉強することの必要性から『オリンピックのすべて』(Jim Parry/Vassil Girginov 著)をメンバー間で輪読・発表した。なるべくかたくならず企業との関連だけでなくオリンピックに関して知らなかったこと、興味を持ったことなどを中心にしながら本のいくつかの章を勉強した。以下がリストである。

- ・日本のオリンピックムーブメント 担当：大江 恭平
- ・オリンピック大会の経済的・環境的インパクト 担当：石田 賢慈
- ・オリンピック教育 担当：武井 みなみ
- ・パラリンピック 担当：田辺 大介
- ・オリンピックとマスメディア 担当：澤田 雄
- ・オリンピックと映画 担当：常安 郁彌

【Joint Forum】

●Joint Forum (ジョイント・フォーラム) とは、年間テーマに関する研究の中から、問題や論点を取り上げ、Exchange Program 中にプレゼンテーション・ディスカッションを中心とする意見交換をはじめとして、より深い勉強を行うセッションである。Joint Forum は通常受け入れ時、訪問時それぞれ行うことになっている。

今年の活動では残念ながら全てのプロジェクトで Joint Forum を開催することはできず、また「オリンピックに対する企業の取り組み」という題でディスカッションを行うことはできなかった。テーマに関しては相手国の学生の意思も考慮に入れた。以下に各プロジェクトのテーマを上げる。

スイスプロジェクト

- ・受け入れ時 「2016年オリンピック開催地ディスカッション」
- ・訪問時 「世界金融危機と各国家の対策」

ドイツプロジェクト

- ・受け入れ時 「How to succeed in Cross Cultural Business ～企業の海外進出と異文化の壁～」

韓国プロジェクト

- ・Joint Forum 実施せず

GET2009年 年間活動表

全体活動/スイスプロジェクト/ドイツプロジェクト/韓国プロジェクト	担当者：常安 郁彌
-----------------------------------	-----------

実際の活動	開始日	終了日	実際の活動	開始日	終了日
GET2009 発足・初回ミーティング	2008/05/09	-----	MOS(一橋国際交流団体)との交流会	2008/11/22	-----
年間テーマ決定	2008/05/20	-----	スイスプロジェクト受け入れ	2009/02/09	2009/02/19
オリンピック関係本輪読期間	2008/06/03	2008/06/20	韓国プロジェクト訪問	2009/02/25	2009/03/03
企業・団体集中訪問期間	2008/07/02	2008/07/16	ドイツプロジェクト受け入れ	2009/02/26	2009/03/09
香港にて合宿(3泊4日)	2008/09/27	2008/09/30	スイスプロジェクト訪問	2009/03/19	2009/03/30
OB会開催	2008/10/25	-----	ドイツプロジェクト訪問	2009/03/19	2009/03/30
一橋祭(学祭)に『じゃがチーズ』店出店	2008/11/01	2008/01/03	GET2010 発足・初回ミーティング	2009/05/22	-----

5月(2008年) <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td></tr> <tr><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td></tr> <tr><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td></tr> <tr><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td></tr> <tr><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td><td>30</td><td>31</td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31		6月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1</td></tr> <tr><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td></tr> <tr><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td></tr> <tr><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td></tr> <tr><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td></tr> <tr><td>30</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日							1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30							7月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td></tr> <tr><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td></tr> <tr><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td></tr> <tr><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td></tr> <tr><td>28</td><td>29</td><td>30</td><td>31</td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31				9月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td></tr> <tr><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td></tr> <tr><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td></tr> <tr><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td></tr> <tr><td>29</td><td>30</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30						10月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td></td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td></tr> <tr><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td></tr> <tr><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td></tr> <tr><td>20</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td></tr> <tr><td>27</td><td>28</td><td>29</td><td>30</td><td>31</td><td></td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			11月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1</td><td>2</td></tr> <tr><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td></tr> <tr><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td></tr> <tr><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td></tr> <tr><td>24</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td><td>30</td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
			1	2	3	4																																																																																																																																																																																																																																																																		
5	6	7	8	9	10	11																																																																																																																																																																																																																																																																		
12	13	14	15	16	17	18																																																																																																																																																																																																																																																																		
19	20	21	22	23	24	25																																																																																																																																																																																																																																																																		
26	27	28	29	30	31																																																																																																																																																																																																																																																																			
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
						1																																																																																																																																																																																																																																																																		
2	3	4	5	6	7	8																																																																																																																																																																																																																																																																		
9	10	11	12	13	14	15																																																																																																																																																																																																																																																																		
16	17	18	19	20	21	22																																																																																																																																																																																																																																																																		
23	24	25	26	27	28	29																																																																																																																																																																																																																																																																		
30																																																																																																																																																																																																																																																																								
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
	1	2	3	4	5	6																																																																																																																																																																																																																																																																		
7	8	9	10	11	12	13																																																																																																																																																																																																																																																																		
14	15	16	17	18	19	20																																																																																																																																																																																																																																																																		
21	22	23	24	25	26	27																																																																																																																																																																																																																																																																		
28	29	30	31																																																																																																																																																																																																																																																																					
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
1	2	3	4	5	6	7																																																																																																																																																																																																																																																																		
8	9	10	11	12	13	14																																																																																																																																																																																																																																																																		
15	16	17	18	19	20	21																																																																																																																																																																																																																																																																		
22	23	24	25	26	27	28																																																																																																																																																																																																																																																																		
29	30																																																																																																																																																																																																																																																																							
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
		1	2	3	4	5																																																																																																																																																																																																																																																																		
6	7	8	9	10	11	12																																																																																																																																																																																																																																																																		
13	14	15	16	17	18	19																																																																																																																																																																																																																																																																		
20	21	22	23	24	25	26																																																																																																																																																																																																																																																																		
27	28	29	30	31																																																																																																																																																																																																																																																																				
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
					1	2																																																																																																																																																																																																																																																																		
3	4	5	6	7	8	9																																																																																																																																																																																																																																																																		
10	11	12	13	14	15	16																																																																																																																																																																																																																																																																		
17	18	19	20	21	22	23																																																																																																																																																																																																																																																																		
24	25	26	27	28	29	30																																																																																																																																																																																																																																																																		
12月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td></tr> <tr><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td></tr> <tr><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td></tr> <tr><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td></tr> <tr><td>29</td><td>30</td><td>31</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31					1月(2009年) <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td></tr> <tr><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td></tr> <tr><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td></tr> <tr><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td></tr> <tr><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td><td>30</td><td>31</td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31		2月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1</td></tr> <tr><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td></tr> <tr><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td></tr> <tr><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td></tr> <tr><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日							1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28		3月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1</td></tr> <tr><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td></tr> <tr><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td></tr> <tr><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td></tr> <tr><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td></tr> <tr><td>30</td><td>31</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日							1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31						4月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td></td></tr> <tr><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td></tr> <tr><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td></tr> <tr><td>20</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td></tr> <tr><td>27</td><td>28</td><td>29</td><td>30</td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日		1	2	3	4	5		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30				5月 <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td><td>日</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1</td><td>2</td><td>3</td></tr> <tr><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td></tr> <tr><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td></tr> <tr><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td></tr> <tr><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td><td>30</td><td>31</td></tr> </table>	月	火	水	木	金	土	日					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
1	2	3	4	5	6	7																																																																																																																																																																																																																																																																		
8	9	10	11	12	13	14																																																																																																																																																																																																																																																																		
15	16	17	18	19	20	21																																																																																																																																																																																																																																																																		
22	23	24	25	26	27	28																																																																																																																																																																																																																																																																		
29	30	31																																																																																																																																																																																																																																																																						
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
			1	2	3	4																																																																																																																																																																																																																																																																		
5	6	7	8	9	10	11																																																																																																																																																																																																																																																																		
12	13	14	15	16	17	18																																																																																																																																																																																																																																																																		
19	20	21	22	23	24	25																																																																																																																																																																																																																																																																		
26	27	28	29	30	31																																																																																																																																																																																																																																																																			
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
						1																																																																																																																																																																																																																																																																		
2	3	4	5	6	7	8																																																																																																																																																																																																																																																																		
9	10	11	12	13	14	15																																																																																																																																																																																																																																																																		
16	17	18	19	20	21	22																																																																																																																																																																																																																																																																		
23	24	25	26	27	28																																																																																																																																																																																																																																																																			
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
						1																																																																																																																																																																																																																																																																		
2	3	4	5	6	7	8																																																																																																																																																																																																																																																																		
9	10	11	12	13	14	15																																																																																																																																																																																																																																																																		
16	17	18	19	20	21	22																																																																																																																																																																																																																																																																		
23	24	25	26	27	28	29																																																																																																																																																																																																																																																																		
30	31																																																																																																																																																																																																																																																																							
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
	1	2	3	4	5																																																																																																																																																																																																																																																																			
6	7	8	9	10	11	12																																																																																																																																																																																																																																																																		
13	14	15	16	17	18	19																																																																																																																																																																																																																																																																		
20	21	22	23	24	25	26																																																																																																																																																																																																																																																																		
27	28	29	30																																																																																																																																																																																																																																																																					
月	火	水	木	金	土	日																																																																																																																																																																																																																																																																		
				1	2	3																																																																																																																																																																																																																																																																		
4	5	6	7	8	9	10																																																																																																																																																																																																																																																																		
11	12	13	14	15	16	17																																																																																																																																																																																																																																																																		
18	19	20	21	22	23	24																																																																																																																																																																																																																																																																		
25	26	27	28	29	30	31																																																																																																																																																																																																																																																																		

日本のオリンピックムーブメント

担当者：大江 恭平

本章の構成

本章では日本におけるオリンピックムーブメントの歴史を、日本での3回のオリンピックを中心に検証し、また日本でのオリンピック教育の展開についても検証している。

日本のオリンピック史

1909年 嘉納治五郎 IOC 委員に就任

1912年 **オリンピック初参加**
(第5回ストックホルム)
→マラソンと短距離の学生2名が参加 総勢4名の選手団

1920年 日本初メダル(第7回アントワープ)
→テニスのシングルス・ダブルスで二つの銀メダル獲得

1928年 日本初金メダル
(第9回アムステルダム)
→陸上三段跳び・水泳男子 200m平泳ぎ

以後日本はオリンピックでこの2種目でめざましい活躍を見せる。
「三段跳びは日本のお家芸」
「水泳大国日本」

冬季オリンピック初参加
(第2回サンモリッツ)
→6名の選手が出場

1940年 **幻の東京・札幌オリンピック**
→第二次大戦により中止

1952年 日本16年ぶりの参加
(第15回ヘルシンキ)

1964年 **東京オリンピック**
→355人の日本人選手
(金16 銀5 銅8)
「テレビ・オリンピック」
「東洋の魔女」
「市川崑の東京オリンピック」

1972年 **札幌オリンピック**
→「日の丸飛行隊」が活躍
また、環境保全が話題になる。

1998年 **長野オリンピック**
→西部グループ堤会長が誘致に尽力
(サマランチ会長との交友関係)
しかし接待問題へと発展
→スケート・スキーにおける日本の活躍
→カーリング、スノーボード及び
女子アイスホッケーが新種目となる。
→環境問題
(スキー滑降コース・道路建設)

オリンピック教育の展開

- ・1964年東京大会で国を挙げての「**オリンピック国民運動**」
→世界的に見ても早い教育実践
(国際親善・人間尊重・平和貢献)
- ・札幌オリンピックでは市民レベルで行われる
- ・長野オリンピックでは「**一校一國運動 OSOC**」
児童の文化交流・異文化理解
→平和な国際社会の実現(オリンピズムの理想)
- ・1978～ 日本オリンピックアカデミー(JOA)
毎年の JOC セッションが最大の事業
- ・JOC の教育的活動
オリンピックデー
(オリンピックラン・コンサート)
オリンピックフォーラム
JOC スポーツフォーラム
作文・フォトオリンピック
オリンピックのユースキャンプへの若者派遣

筆者はオリンピック報道を捉えていく際に必要となる「**オリンピックリテラシー**」をスポーツ・環境・文化の三本柱に対応させることで、オリンピック教育を構想している。

感想・意見

◆日本が1912年という早い時期からオリンピックに参加していたというのは、自分にとっては驚くべきことであった。また、初参加から初のメダル獲得までに8年足らずであることも、日本の当時のスポーツ水準の高さを実証しているのではないだろうか。また、オリンピック教育に関する著者の考察も、とても興味深いものであった。

【参考文献】

『オリンピックのすべて 古代の理想から現代の諸問題まで』ジム・バリ、ヴァシル・ギルギノフ 著
舛本 直文 訳・著

オリンピック大会の 経済的・環境的 インパクト

担当者：石田 賢慈

オリンピックの経済的効果

1. 肯定的効果

- ・オリンピックによる GDP の増加
Ex. 73 億豪ドルのプロジェクト
- ・失業率の減少
1986 年：128000 人
→1993 年：78000 人
(1992 バルセロナ大会)
- ・宿泊施設の増加
ホテルベッド数 38 パーセント増加
- ・スポーツ施設の増加

2. 否定的効果

- ・賃借料の高騰
ホテルの宿泊料が3～8倍へ
- ・国の経費増大
←個人・企業・組織などのスポンサーが必要
- ・周辺国への投資の減少

1. オリンピックによる破壊

- ・1992 年アルベールビル大会
会場が分散→ホテル・施設も分散→環境破壊

2. 対策(アトランタ大会)

- ←国連 リオデジャネイロ大会により
「持続可能な開発」
 - ・ビルを撤去して 650 本植樹
 - ・光電池システムの導入
 - ・エネルギー効率のいい照明の使用
 - ・バス・地下鉄の利用促進
- (アテネ大会)
- ・土地利用に細かな規制
 - ・大会に関する建築物建設の抑制
 - ・仮設建設は速やかに撤去

感想・意見

◆オリンピックはスポーツの祭典という本来の意味を超えた大きなイベントとありつつある。しかし、オリンピックに限らずイベントが大きくなると経済的・環境的な問題は避けることが出来ない。そのため、オリンピックだけを問題視するのもどうかと思った。

【参考文献】

『オリンピックのすべて

古代の理想から現代の諸問題まで』
ジム・バリー、ヴァシル・ギルギノフ
著

舛本 直文 訳・著

オリンピック教育

担当者：武井 みなみ

本章の構成

本章ではオリンピック・ムーブメントの教育的使命を説明するとともに、その教育的な課題の中での NOC の役割について検証している。

IOA (国際オリンピックアカデミー)

クーベルタンはオリンピックを通じてあらゆる世代の教育プログラムとしてスポーツを取り入れることを目指す。
⇒IOA の設立(1961年)

—目的—

オリンピック大会の社会的原理および理想の科学的基礎のみならず、教育学の研究と応用が IOA の目的を構成している。

—主な活動—

- ・IOA の国際年次セッション…NOC から派遣される若い男女が参加
- ・国際大学院セミナー…大学院生が参加
- ・オリンピズムに関連した組織のための特別セッション…NOC,IF、スポーツジャーナリスト連合、審判、コーチなどが参加
- ・大学、スポーツ競技団体など教育的な理由でオリンピアを訪問する組織や団体への宿泊サービスの提供

上記のような活動を通じてオリンピックの理想を刷新して世界へと広めることを目的とする。

NOC(各国オリンピック委員会)における教育

NOC はオリンピック憲章に従い、各国においてオリンピック・ムーブメントを発達させ保護する義務を負う。

—目的—

目的は各 NOC によって異なるが、JOC の場合、『オリンピック・ムーブメントを推進して、スポーツを通じて世界平和の維持と国際交友親善に貢献

するとともに自国のスポーツ選手の育成・強化を図ること』とされている。

—NOA の創設—

教育的行事と機会の提供のために、学生・教師・ジャーナリスト・選手などに対して毎年ワークショップを行う。

—教育システム—

学校における体育カリキュラムの推進、教材や指導のアドバイス、教師の仕事のサポートなどを通してスポーツの振興をする。

そのほかにもオリンピズムに関する教材づくりや芸術の推進、メディアとのよい関係の構築、ユースキャンプを開催して若者の活動に貢献するなどの活動をしている。

Ex. イギリスでは「コンタクト」システムを通じて、各学校の教師がイギリスオリンピック委員会(BOA)のワークショップへの参加者募集や、オリンピック関連の教材・資料の PR を行っている。

オリンピック教育学

—オリンピックの哲学とは—

- ・スポーツで協力して仲良く競争する
- ・フェアプレーの価値と、目標に向かって努力する中に喜びを見出し、それらに基づいてより平和な世界を作り上げることに貢献する

—目的—

- ・体育カリキュラムの中心としてスポーツそれ自体を取り戻す
- ・能力、教育を身につけた熱心なスポーツ人を育てる
- ・共通の目標に向かって自己責任と忍耐を育む
- ・個人の成長と文化の違いを理解する

感想・意見

オリンピックが単なるスポーツの祭典にとどまらずに、国境を越えた文化の違いの理解や個人の成長にもつながっているという事実を知って、オリンピックの奥深さを感じた。

【参考文献】

『オリンピックのすべて

古代の理想から現代の諸問題まで』
ジム・バリ、ヴァシル・ギルギノフ
著

舛本 直文 訳・著

パラリンピック

担当者：田辺 大介

パラリンピックの語源

“パラ”とは、ラテン語の接頭辞「para」からきていて、「並行」という意味。パラリンピックは、オリンピックに「並ぶ」大会であるということである。

障害者への態度

古代ローマ・ギリシャ時代→障害者に対して排他的。
国家を守るために間引きを行う。

20世紀 →二つの世界大戦を経験したことで、
障害者に対する理解が深まる。
(対戦を経て、多くの障害者が出て、身近な存在となった。)

パラリンピック年表

1888年 イギリスで聴力障害者のためのスポーツ
クラブが設立される。

一次大

1924年 パリで世界初国際サイレント大会が開
れる。

1944年 イギリスの病院で、スポーツがリハビリとし
て取り入れられる。

二次大

1948年 国際車いす大会が
同病院で開催される。

1960年 第17回ローマ大会
初めてパラリンピックに、障害を持つアスリ
ートが参加する。

1976年 初の冬季パラリンピックが開催される。

1989年 国際パラリンピック委員会 (IPC) が発足す
る。

① 治療としての
スポーツ

2003年 ヨーロッパ
障害者年宣言
↓
現在

② 競技としての障
害者スポーツ

③ 障害者スポーツの発展

① 治療としてのスポーツ

あくまで、リハビリの一種として扱われ、障害者
のスポーツは医師の処方によって行われるもの
だった。そのため、障害者スポーツの競技性は
薄かった。

② 競技としての障害者スポーツ

IPCの発足とともに、障害者スポーツは結果を求
めるような、競技性の高いものへと変わってい
った。パラリンピックは、障害者アスリートにとっ
ての自己実現の場であり、一般大衆の障害に関す
る意識を高めるものとなった。一方で、パラリン
ピックの商業化や、ドーピングなどの問題も増えて
いった。

③ 障害者スポーツの発展

更なる障害者スポーツの発展により、草の根レ
ベルでの障害者がスポーツをするチャンスをひろ
げることや、オリンピックなどの国際大会で、健常
者、障害者が区別なく一緒に競技できるようなこ
とが求められる。また、障害は障害者個人のせい
ではなく、障害を受け入れられない社会環境
や人々の意識による問題だということを、社会に
訴えていくことがこれからのパラリンピックにおい
ての課題である。

感想・意見

◆パラリンピックが治療の一環としてのスポーツから
発展したものだということが強く印象に残った。パラ
リンピックはオリンピックと同様にドーピングなどの問題
があるだけでなく、障害者が参加する大会ということで、
公平さを保つために障害を区別することで、障害者が
障害者として浮き彫りになるという問題もあると思っ
た。

【参考文献】

『オリンピックのすべて 古代の理想から現代の諸問
題まで』ジム・バリー、ヴァシル・ギルギノフ 著

舛本 直文 訳・著

オリンピックと マスメディア

担当者：澤田 雄

マスメディアというのは何か

・マスメディアというのは何か…

「メッセージが情報源から受け手に伝わっていく経路である」

メディアは、新しい情報を提供する機会とオリンピックに関する私達の見方を制限している。メディアを通じた情報は常に編集され、誰かによって再現されたものである。よってある程度においてそれは bias のかかったものとして認識する必要がある。

オリンピックとマスメディア…進化する過程

・新聞

近代オリンピック黎明期からの強いメディアとして存在。現在でも大きな力を持つ。

・ラジオ

1922年にイギリス放送会社(BBC)が設立されて始まる。技術的な限界から1936年のベルリン大会までは地域限定されたものであった。

新聞、ハリウッドの映画産業界はラジオの参入を脅威とみなし、オリンピックのメディア媒体としての規制と制限を要求。

・テレビ

オリンピックの最初の動く映像を作ったのはテレビではなく映画であった。初めてテレビ放送されたのはベルリン大会である。

オリンピックスポーツのお陰でテレビが飛躍的に発展したという見方も出来る。実際にオリンピック前にはテレビの売り上げが上がり、各社競争に躍り出る。

多額の放映権料をIOCは受け取っている。これはオリンピックの商業化とも深く結びついていることであり、IOCの収益の50%が放映権料にあたる。

・インターネット

1995年にIOCのサイトができ、1996年のアトランタ大会から始めて組織委員会の公式サイトが設置された。やはり最大の利点はリアルタイムでコミュニケーションが可能などところにある。現在ではチケット販売のサービスなども登場し、多くの人が利用している。

インターネットの到来における大きく脅威にさらされるのはテレビであり、現在、IOCはオリンピックのインターネットを通じた配信においては禁止している。もちろん、これはテレビから得られる放映権料を確保するためである。

ニュースからメディアイベントへ

・オリンピックはマスメディアとの相互作用によって、単なるスポーツ競技の大会から、何百万人ものひとにアピールできる特別のジャンルに変化。

・1984年ロサンゼルス大会以来、公認ジャーナリストの数が参加選手を上回る。

・テレビ側は放映権料を支払う代わりに、広告企業から広告料を請求する。これは資料率のレベルによって左右され、視聴率の低かった1992年のバルセロナ大会では、NBCという放送局は広告主たちに9000万ドルを返金している。

感想・意見

◆オリンピックの商業化という今年のテーマから俯瞰すると、メディアとの関係は非常に重要である。本来アマチュアリズムの祭典として始まったオリンピックが、商業化してしまうのは、崇高な理念を壊してしまうという理由からしてみると、一見悪いことのように思える。しかし、その商業化が需要と供給の観点、つまり我々の生きる資本主義社会の中から見ると、一民間団体であるIOCが資金の確保のためにオリンピックに商業要素を組み込むというのは、至極当然のことなのである。また、その商業化が結果としてスポーツの発展に寄与していることも忘れてはならない。

【参考文献】

『オリンピックのすべて 古代の理想から現代の諸問題まで』ジム・バリー、ヴァシル・ギルギノフ 著

舛本 直文 訳・著

オリンピックと映画

担当者：常安 郁彌

オリンピック記録映画概観

◆スポーツと映像の深い結びつき

【夏季五輪】

1912年 スtockホルム大会
(初のIOC公式記録映画)

1936年 ベルリン大会
(「Olympia」、身体の映像美、ナチズム)

1948年 ロンドン大会
(平和のオリンピックを描く)

1964年 東京大会
(市川崑監督「太陽のオリンピック」コカコーラ映像
⇐企業の資金援助)

1972年 ミュンヘン大会
(世界の8名の名監督によるオムニバス形式、描かれるそれぞれのオリンピズム)

1984年 ロサンゼルス大会
(商業五輪 選手中心の物語としての記録映画
⇐全競技の記録でなくなった)

2000年 シドニー大会
(エンターテイメント主義、オリンピックロマンス)

【冬季大会】

1924年 シャモニー大会

1968年 グルノーブル大会
(映像、音楽の叙情的映画)

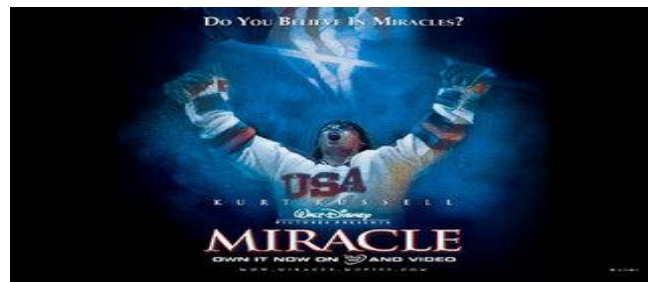
1980年 レークプラシッド大会
(ABC放送制作、ドラマ映画へつながるUSA大合唱)

2002年 ソルトレークシティ大会
(9.11以後、アメリカの威信の表明
オリンピックロマンスとオリンピズム)

1982年「マイ・ライバル Personal Best」
(スポーツとジェンダー、同性愛、身体性
自分との戦い、自己のベストを尽くすこと=Personal Best)

1992年「冬の恋人達 The Cutting Edge」
(選手間の愛情、参加することの意義、アスリートの心情、努力、エンターテイメント性)

2004年「ミラクル Miracle」
(1980年大会アイスホッケー、ソ連を打ち破り奇跡的勝利をもぎ取るアメリカチーム、アメリカニズム
⇐9.11直後のアメリカで制作、アメリカを鼓舞)



(*ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント)

オリンピックにおける映画の機能

- ◆各競技の記憶、感動の「再生産」
- ◆記録映画は、忠実な「記録」から、製作者や時代背景、政治的意図に合わせた「編集」へシフトしてきた。(『公式記録映画』として一定の決定力を持つ)
- ◆映画や各メディアによるオリンピックのイメージの再生産は大切であるが、再生産すべきものは何か、ということについては熟考されるべきである。選手個人の物語(オリンピックロマンス)や政治的メッセージ(プロパガンダ)より崇高なオリンピズムを再生産すべき。つまり、オリンピックによる平和の促進(各国選手の交流)、フェアプレーの称賛、スポーツの楽しさなどを映画に盛り込むべき。

感想・意見

◆映画は過去のオリンピックを体験したことがないものにとって数少ない資料となるが、そこで描かれたものを額面通り受け取ってはならない。大会自体と制作された背景を考慮する必要がある。

【参考文献】

『オリンピックのすべて

古代の理想から現代の諸問題まで』
ジム・バリー、ヴァシル・ギルギノフ
著

舛本 直文 訳・著

オリンピックドラマ映画

◆映像による語り継ぎ、ヒーローや競技の伝説化

YOMIURI ONLINE | 読売新聞

JOC パートナー

(株)読売新聞社



経緯

オリンピックに対する企業の取り組みというテーマ設定をしたのち、オリンピックに直接関わっているスポンサー企業を訪問し、色々とお話を伺いたいと思い、JOC パートナーである読売新聞社に訪問のお願いをした。

数あるスポンサーから読売新聞社を選んだのは、商業化と併せて、メディアとオリンピックの関係にも興味があったからである。

インタビュー

◆はじめに北京五輪対策本部事務局長塩見様より、TOP、JOC パートナーなどの簡単な説明があった。

TOP (ワールドワイド) はパナソニックやコカコーラなど。

JOC、BOCOG (北京オリンピック組織委員会パートナー) にスポンサーは分けられ、使用ロゴ、呼称が違ってくる。

パートナーは基本的に一業種一社。日本ではスポーツ用品と航空関係のみ例外。

読売新聞社は日本国内で JOC マークの使用権 (通称第二エンブレム) と「オリンピック日本代表の公式パートナーです」と呼称する権利がある。「読む声援」が読売新聞社の北京オリンピックの宣伝文句である。しかし、これらの権利は新聞紙面上に限ったことであり、WEB上および「The Daily YOMIURI」などではこの権利はない。

【以下 インタビュー内容】

◆紙面上での日本選手団の応援に限る。読者が読売新聞を読んで、日本選手団を応援するようになってもらえばよい。ただ、記事を選手に対して批判的に書くこともある。公平に記事は書く。日本選手団に気持ちよくプレーしてもらい、いい成績を残してもらおう。

◆私自身 (塩見様) もとは運動部出身であり、現場で日本のスポーツをたくさん見てきた。

かつてのオリンピック大会において新聞社がスポンサーになることはなかったし、新聞社がスポンサーとなるのはいかがなものかと思っていた。しかし、2001年に朝日新聞が日韓共催サッカーワールドカップにおいて「公式サプライヤー」という地位を獲得した。これは

(株)読売新聞社

北京五輪対策総合本部
事務局長

塩見 要次郎 様

広報部 市塚 修 様

インタビュアー

担当者 常安 郁彌

大江 恭平

田辺 大介

澤田 雄

《質問内容》

Q 読売新聞社は実際日本選手団にどのような支援を行っているのか。

Q なぜ一報道機関である読売新聞社がスポンサーになろうと思ったのか。

オフィシャルパートナーとは別枠で設けられ、地元の公式パートナーのようなもの。これは衝撃的だった。この大会において朝日新聞が公平な報道ができたかどうかというのは疑問が残る（空席問題など）。ただスポンサーである朝日新聞がインサイダー情報などを握るといったことはなかった。高校野球の朝日、プロ野球の読売と野球が新聞社の発展を支えてきた。新たなフィールドを開拓するということが必要であり、これを契機に読売新聞社は全種目で日本選手団に対するスポンサーとなれるオリンピックのスポンサーとなることに興味を持ち、2003年にJOCパートナーになる。日本選手全体に対してのパートナーであり、契約を更新すれば長く、また全種目について支援でき、取材できる。これはよいイメージを読売新聞社にもたらすであろう。

Q スポンサーになることで予想されるメリットは何か。またそれはスポンサー料と比べてどのようか。

◆ JOCパートナーになるということはスポーツ全般の日本代表選手を応援する保証権を得るということで、メリットは「ブランドイメージを高める」ということに尽きる。好イメージを獲得できると思っている。スポンサー料は秘密だが、それ相応の効果はあると思う。ロンドン大会へはスポンサー契約更新の方向ですすんでいる。

Q スポンサーになることで広告以外のプラス要素があるか。

◆ 広告とはイメージである。新聞における広告収入の増加の可能性はありうる。TOPパートナーのパナソニックの広告。（オリンピックは新たなテレビを購入する機会を与えるから。）読売とパナソニックにつながりはあるが、広告それ自体は本来の目的ではない。

Q 日本選手団のスポンサーになることによって、競技会場などで有利になることはあるか。

◆ 取材に対しての有利不利はない。スポンサーが優遇されることはなく、あくまで取材をするのは読売の記者。

Q オリンピックを報道する際に心がけていることなどはあるか。

◆ 北京オリンピックは不安定要素（チベット問題、大地震）などもあり特別なオリンピックである。国際オリンピックは身分証明カードが必要で、運動部の記者にだいたいカードは渡される。通常の大会だと、運動部の記者20人、社会部の記者5,6人で行くのが通例だが、今回は20人カードなしの記者をさらに追加して大規模な記者団を送る。やはり、アジアで三番目のオリンピックであり、中国はアジア最大の国家でもある。オリンピックに関連して、中国とはどんな国か、北京とはどのようなところか、政治は、チベットは、などを伝えていく。

今回のオリンピックは何かトラブルが起きるかもしれない。第2の天安門事件が起きるかもしれない。何が起きるかわからないゆえに大規模な記者団で、何が起きてても対応できるようにしたい。的確に取材するため通訳や宿舎、車などの準備はしっかりしている。世界のスーパースターや日本選手団の活躍と合わせ、オリンピックを境にどのような変化があるか、今後の中国の変化というものに注目したい。

Q 環境に配慮したオリンピック運営についてどう考えているか。また具体的に読売新聞社が活動していることがあるか。

◆ 読売新聞社側としては特にない。中国政府は規制を厳しくしている。7月20日～9月20日の偶数日では偶数ナンバーの車両は使えない。つまり11台車を用意しているが半分しか使えないということだ。政府は車の排気ガスを気にしているようだ。

Q 新聞社にもスポンサーがつくと思うが、そのスポンサーに有利な記事を優先的に書くのか、それとも報道の中立性を保つように努めるのか。

Q オリンピックとは平和・スポーツの祭典という輝かしいイメージの裏にいくつもの問題をかかえていると思うが、メディアの果たすべき責任という観点から、読売新聞社はオリンピックをどのように報道することが最善と考えているか。

Q チベット問題が引き金でスポンサー企業の製品不買運動が引き起こった。読売新聞社は選手をサポートする側としての立場とスポンサーとしての自社の利益という双方のバランスをどのように捉えているか。

Q 近年、オリンピックの過度の商業化が批判されている。商業化の傾向の拡大によってアマチュアの祭典というオリンピックの理念が失われつつあるという声もある。この点について読売新聞社はどのように考えているのか。

Q オリンピックが近づくにつれ、各日本代表選手の情報が日々報道されているが、メディアが一方向的に盛り上がっているという印象を受ける。選手に過度な期待をかけ、それが負担となっていくことがあるように思える。スポーツ選手の報道において、ニュース性と選手への配慮という二つの境界線をどのように捉えているか。

Q 日本人はオリンピックに対して非常に盛り上がる、という国民性を持っていると私は考えるが、どう思うか。

◆広告によって新聞記事を書くのではなく、新聞の記事は読者の視点を第一にして作成する。読売新聞は発行部数も多く、日本国民としてどうかという視点を大事にしている。広告料の大小でスポンサーの扱いをかえることなどはしない。

◆スポーツ全般、F I F Aもそうだが、選手がいい環境で自分を鍛え、いいプレーをファンに見せるのはどうしてもお金がかかる。昔、選手は自衛官の円谷選手のように国のために戦う修行僧のようなものであったが、はたしてそれがいいことなのか。北島選手が金を2回獲るということはコーチや環境など、お金がかかる。商業化とは避けては通れないものである。応援したい人と選手を仲介するためにスポンサーがいる。選手が自分を鍛えて、みなにそれを見せるのに、正当な報酬を受け取ってもいいのではないか。ただ、金メダルのためにドーピングを使うといったことはいけない。正当な方法で鍛え、正当に戦い、正当な報酬を得る、これ自体はある種の進歩ではないか。正しい商業化をしていかななくてはならない。

◆チベット問題での不買運動は中国政府に対してのもの。だからワールドワイドスポンサーが不買運動の対象になっても、読売新聞に関しては特に不買運動は起きることはないと思うし、オリンピック自体への抗議でもないし、日本選手団に対してでもない。JOC パートナーとして非難されることもないだろう。ただ危険性はある。しかし、そのようなことだと困ってしまう。オリンピックの開催国がなくなってしまうのではないか。少なくとも、JOC とチベット問題は無関係である。

◆アマチュアの祭典であるオリンピックとワールドカップとの差が歴然であった。アマチュアリズムというのはある程度貴族的な考え方。アマチュアリズムとはきれいかもしれない。しかし、より多くの選手、ファン、競技の発展のためには商業化が行われることでプラスになる面も多い。商業化は悪いことではないのではないか。

◆騒がれるのはトップレベルの選手であり、トップレベルの選手としては報道されることで得るものがある。選手は国から送り出されているわけではなく、日本人の期待によって後押しされている。騒がれすぎていやだという人は最近いない。確かに各紙、テレビでは騒いでいる印象をうけることもあるが、ある程度の盛り上がりは仕方がない。情報も必要だし、多少のから騒ぎはあると思うが、節度をもって報道すべき。

◆私が7歳の時、東京オリンピックが開催され、当時の様子、五輪のマークなどよく覚えている。それからスポーツが好きになり、オリンピックが好きになった。オリンピック熱は悪いことではないと思う。スポーツを愛することによって得る豊かな人生があると思う。

Q 五輪対策本部はいつ始まり、どのような仕事をするのか。

Q ロンドン大会では JOC パートナーに読売新聞社になるかどうかは不明と言ったが、塩見様の個人的な意見としては継続して契約したほうが良いと考えているか。

Q 今年の注目種目は何か。

Q 最後に、記者として欠かせないこととはなにか。

◆取材団は各部の人が集まるので、その 60 人を統括する役割を持つ。あとは宿や、通訳、航空券などの手配をする。実際に報道はしない。07 年 11 月あたりから動いている。もっとさかのぼると 2005 年秋から。取材団が大きな集団になるので、話し合いの場のセッティングをしたり、大まかな指針などを話したりする。

◆確実に JOC パートナーにはなると思う。読売新聞社は他社に対して JOC パートナーの優先権をもっているのだから、その役を降りない限り朝日新聞などの他社にそれを奪われることはない。自社ブランド価値の向上にはよい手段であるし、2016 年にもし東京オリンピックが開催されるとなるとその重要性は増す。今のところ候補地の上位に東京はある。スポンサーを辞める時というのは、JOC に不祥事があった時だが、JOC 全体がつぶれるということはないだろう。

(※追記 読売新聞は引き続き、日本オリンピック委員会のオフィシャルパートナーとなり、2010 年のバンクーバー冬季五輪、2012 年ロンドン五輪を目指す日本選手をサポートすることが 2009 年 6 月 1 日に決まり、今回の契約から、「The Daily YOMIURI」も権利が認められた。)

◆オリンピックは最初が肝心だから、今年は 9 日の男女柔道。最初が好調だと連鎖反応で続いていく。日本はだいたい水泳と柔道がメイン。陸上は今年期待できない。私個人として、サッカーが好きだから反町ジャパンは応援している。サッカーは様々な会場で行われるということもある。

中国は万博も控え、いろいろな問題を内包しているが、どんなことがおきても対応できることが大事だと考えている。

◆昔、野球の巨人担当だったときは、読者の関心が高かった。サッカー担当のときも国民の期待が高かった。関心や期待がどうであれ、ダメだったらだめと書かなくてはならない。悪いことは悪いと書く。是是非非なのだ。

感想・意見

今年の GET の初企業訪問であったため、メンバー全員緊張気味ではあったが、読売新聞社の担当の市塚様が快く対応してくださり、五輪対策総合本部の事務局長の方から直接お話しを伺うという本当に貴重な体験をさせていただいた。

今回の訪問で考えたことを以下にまとめたい。

◆商業化ということを肯定的に捉えることもできるということ。ともすると商業化を悪と捉えてしまいがちだが、選手と応援したい人を結ぶのがスポンサーであり、五輪のような大きな催し物にはそれなりのお金が必要になり、それらのための必然として商業化を見ることもできる。ただし、勝つためにお金が必要であるということはオリピズムと照らし合わせると大いに議論の余地がある。商業化の持つ機能とその結果出てくる事態を客観的に見なくてはならない。

◆近代五輪を押し進めるものの大事な要素が人々の思いであること。ただし、各人が五輪の感動を「経験」し、適度にそれらが「再生産」されることからその思いが生まれる。やはり、メディアは近代五輪に欠かせない存在である。





TOP パートナー

日本マクドナルド(株)



経緯

オリンピックに対する企業の取り組みというテーマ設定をしたのち、オリンピックに直接関わっているスポンサー企業の読売新聞社を訪問後、今度はTOP（ワールドワイド）パートナーであるマクドナルド社に訪問のお願いをした。

JOC パートナーと TOP パートナーとの違いや、TOP パートナーはどれほどオリンピックに介入できるのか、などそれぞれはつきりした疑問を持って訪問した。また、マクドナルドと言えば私たちに身近でありながら、世界に広がる大企業であるので、経営に関する質問や、食とスポーツに関する質問など幅広い内容について伺った。

インタビュー

◆今回のインタビューはもともと用意していた質問であれば二部構成であり、オリンピックとマクドナルド社との関係を伺った一部と、それ以外の経営や環境対策について伺った二部であった。ページ数の関係から二部の質問の大部分は割愛した。ただし、環境に関する質問だけは残した。オリンピックと絡めて環境の話が出たからである。

後半は、インタビューを一通り終えてからの追加の質問になっている。インタビュアーはそれぞれ自由な意見を発表した。

【以下 インタビュー内容】

◆マクドナルドはワールドワイドスポンサーであり、日本マクドナルドがスポンサーというわけではない。マクドナルドは世界 118 カ国で展開しているが、スポンサーに参加していない国のマクドナルドもある。

具体的な活動は、選手村のオフィシャルレストラン（関係者のみが利用できる）を2つ構えている。そして北京に設置されるメディアセンターにおいても2店出店する。こちらは一般のお客様もご利用いただけます。選手村の方はフリーフードとなっており、選手村にほかに出店しているお店はフードコート式になっているが、マクドナルドはご注文をいただいて、それから商品を作るという体制をとっている。**食の提供がまずひとつの活動である。**世界のマクドナルドで販売しているスタンダードなメニューを取りそろえており、またヨーグルトやサラダなども特別に店頭に並ぶ。てりやきなどの日本限定メニューは販売しない。

日本マクドナルド(株)

コミュニケーション部
マネージャーアソシエイト

山本 美和 様

インタビュアー

担当者 常安 郁彌
石田 賢慈
上田 晃司
高橋 敏哉
武井 みなみ
田辺 大介
澤田 雄
干場 敦

《質問内容》

Q オリンピックスポンサーの具体的な活動内容はどのようなものか。

Q スポンサー料はどの程度の額で、それに対してどの程度の効果を見込んでいるのか。

Q オリンピック開催や日本代表に向けて何か特別な援助をするか。



また、スポンサーとしての社名の掲示や、アスリートに広告として登場してもらうこと、チケットプレゼントなどの宣伝活動がある。

◆スポンサー料は言えないが、とても高額である。だが、広告換算（例えばテレビにコマーシャルを1億で出すとして、費用対効果を計り、2億の結果が出たとすると、広告換算で1億円の効果と言う）では計りにくいものである。PRの部署では広告と違って、お金を払わずに宣伝することを主としている。たとえばイベントを主催し、その模様をワイドショーなどで取り上げてもらう。そうするとその放送の1分、本来ならば払わなければならなかった価格を出して、効果を換算することもある。

マクドナルドがスポンサーとして露出していくことの目的は二つある。一つは**イメージアップ**だ。ブランドイメージの遡及である。これはなかなか計りにくいものではあるが、日本でいえば、日経の企業イメージランキングなどを引用する。イメージアップは、お金を出せばそれ相応の効果があるともいえないのである。二つ目は、**信用**だ。企業としての信用獲得である。これはお金に換えられない部分の獲得である。この価値は非常にあると思う。

◆オリンピックディランなどの活動や、今年は観戦ツアーとチケットのプレゼントを企画した。この活動自体はこのスポンサーでもやっていることである。もう一つは、チャンピオンキッズイベントだ。これは各国から子供を募って、オリンピックへちびっこ特派員として参加してもらうというものだ。写真や作文を送ってもらい、何かをがんばっている小学生に北京に行ってもらおう。実際、選手に会ったり、選手村を見学したり、北京の観光スポットを回ったりする。この経験を通して、将来世界に向かって行って欲しいし、世界を知ってもらいたいと思っている。また、オリンピックの体験を通して、最後に新聞を作ってもらおう。

元来、マックは子供との活動が多く、これは子供達に未来の世界人になってもらうためのサポートをするものである。オリンピックで何かを感じてもらいたいというのが基本だが、もちろんCSRの一環としてもある。

オリンピックスポンサーは、役割や特典があまりなく、自社で企画していくことがメインとなる。たとえば、オリンピック以外の世界的スポーツイベントとしてFIFAワールドカップがあり、マクドナルドはスポンサーとして活動しているが、FIFAワールドカップはスポンサーの役割や特典が明確だ。フラッグボーイ・ガールはコカコーラ社、エスコートキッズはマクドナルド社といった具合だ。

ほかの活動として、ARGというオンラインゲームのゲームクリエイターと共同で「the lost ring」というゲームを展開している。これはオリンピックにちなんだものだが、すべての謎は北京オリンピックで明かされるというゲームである。このゲームの隠れたスポンサーとして、IOCとマクドナルドがいる。

また、選手村で働く人は36カ国のマクドナルドから130人くらいが集まる。日本からは8人ほど行く予定だ。これはオール・ジャパン・クルー・コンテストという接客や調理技術を競う全国大会があって、そこで優秀な成績を収めた人を日本代表スタッフとして、選手村で働いてもらう。

選手村にマクドナルドがあることは世界の選手にとっては大きいことである。開催国によってはその土地の食文化が合わないことや、体

調に影響を与えてしまう可能性もある。カロリーコントロールをしなければいけない選手を除いて、**安心して食べ慣れているものを食べられるという利点がある。**

Q 食料提供の際に廃棄物が出てしまうと予想されるが、それについてのどのような対応を取るつもりか。

◆基本的に、開催各国の環境対策、基準に合わせて活動する。今回もエコ活動があるから、それに参加する。日本ではレジ袋削減、やメイドフオーユー活動などを展開中だ。

Q 各国のマクドナルドでオリンピックに対する積極性や関係は異なっているか。

◆オリンピックのワールドワイドサポーターなので基本的には統一する。決起集会などで統一を図る。ただ力の入れようは各国に温度差がある。参加意欲や、お金のかけかたが違ってくる。オリンピック自体に対して、国が盛り上がりがないところは、キャンペーンなど特にやらない。予算もあるので、日本のオリンピックに対する意欲は高い。また日本のプレゼンスはマクドナルド内で高い。なぜなら、アメリカに続き、マーケットが第二位の大きさを持ち、ワールドワイドで活動を行う際、日本が大体リーダーシップを発揮するからだ。日本が動かないということはない。

Q 北京オリンピックにおいて、チベット問題が起こったが、スポンサーとしてどのような考えを持っているのか。

◆オリンピックのスポンサーになること自体にリスクをあまり感じてはいない。たとえば、CMで起用した俳優がスキャンダルを起こしたりしたら、これはリスクがある。もちろん、リスクが全くないとは言えませんが、**特にリスクヘッジの必要があるとは思っていない。**

今回のチベット問題はすごくイレギュラーであったと思っている。確かに広告のマイナスはあるだろうが、今回の暴動は反中国政府運動なので、不買運動も直接関係があるとは思わない。あくまで、北京のでも、開催国のでもなく、**オリンピックのサポーター**なので、個別な問題には言及したりすることはない。もちろん、ケースバイケースではあるが、今回はない。

Q 今後もスポンサーを続ける予定か。

◆次回のロンドン大会までは続けることで決定している。ロンドンの次の大会はわからない。

Q 環境配慮のためのマックの活動とは具体的に何か。

◆食品リサイクルは国の基準を上回る効果が出ている。レジ袋削減も効果がある。その具体的な数値はHPを参照。一人1日1kgCO₂削減キャンペーンに参加しており、環境省と共同でやっている。環境省のHPにてチャレンジ宣言をし、登録していただくと、チャレンジカードがもらえ、それを店頭でみせていただければ、ビッグマックが割引されるというものだった。結果、環境省のサイトにアクセスが殺到した。他には、そのような活動をトレイマットで告知している。

サミットではライトダウンキャンペーンを行っている。このような活動はまず、何店舗かで実験をして、その後全国に展開するという方法で行う。紙カップを辞めて、陶器カップにすればいいとの指摘がよくされるが、全国の店舗のカップを陶器に変えること自体が、変えない場合と比べ、エコではないとの結果が出ている。マイカップリフィルの活動もマクドナルドのワールドワイドの衛生基準に合わないのでできない。



Q 子供との活動が多いと聞いたが、CSR との関係はどうか。

Q オリンピック選手村店でもスマイル0円はやっているか。

Q 映画「スーパーサイズミー」をはじめ、マクドナルドの食品が体によくないということが喧伝されていた時があったが、オリンピック選手は実際、マクドナルドの商品を利用するのか。

Q オリンピックを推進する企業のなかには、もちろん企業イメージのアップということもあるが、取り組んでいる人たちが実際オリンピックを経験し、感動し、オリンピックへの熱い思いから動かされていると私は考えているが、マクドナルド様はどう考えているか。

◆確かに、子供との活動は CSR の一環だが、多くはイメージアップを図るものだ。ハッピーセットの人気など、子供からの支持を集められている。利用していただいたことへのマクドナルドからの還元の一環である。

◆オリンピックは世界共通だが、選手村でもスマイル・フリーとして行うと思う。スマイル0円は日本オリジナルのものだった。1980年代に大阪のアルバイトの方が考え出したもので、それが全国、外国へ展開していった。

◆「スーパーサイズミー」を見た後で、私はマクドナルドの社員でもあることからか、マクドナルドの商品が食べなくなつた。あの映画を見ても、正しい知識を持っていれば、何も恐れることはない。アスリートは自分の食生活を管理するプロだ。何をいつ、どの程度食べるべきなのか、何を食べてはいけないのかなどを正確に把握している。体作りに必要なものを必要な時に取り入れる。だから、正しい知識を持って正しく食べるアスリートにとっては何も問題はないのである。一度にたくさん食べることはないだろうが、手軽にカロリーをとれるので、適宜食べていただいている。試合後に食べるアスリートが多いようだ。マクドナルドは体によくないというのは極端な考え方で、気にしたり、敬遠されたりすることはない。

◆オリンピックは世界のスポーツの祭典であり、ほかにこのようなものはなかなかない。オリンピックをサポートすることで会社自体、ブランドイメージのアップや社員のプライドアップを図っている。オリンピックのワールドワイドサポーターである企業で働いているという、インターナショナルのプライドの醸成に役立っている。また社員一人一人がグローバルを感じることができ、モチベーションアップにつながる。スタッフ全体が盛り上がるができる。

感想・意見

GET 全体としては 2 回目の企業訪問でもあり経験を積んだメンバーが積極的に質問をした。初参加のメンバーは少し緊張気味ではあったが、マクドナルド社の担当の方が私たちの様々な質問に快く丁寧に答えていただき、いい雰囲気インタビューをさせていただけたと思う。以下に考えたことをまとめてみたい。

◆各企業はオリンピックに対する人々のイメージやオリンピックそれ自体の持つイメージと重なったり関係したりすることで、自社のイメージアップを図っている。であるなら、そのオリンピックのイメージをただ消費するだけではない。積極的にオリンピックのイメージ作りに参画するべきである。では、人々がなんとなく感じるオリンピックのプラスのイメージの源泉は何か。それはまさしくオリンピックである。企業はオリンピックの消費者となるのではなく、オリンピックの強化、敷衍に協力すべきで、オリンピックが普及すれば「見返り」も期待できる。商業化を迎えて、企業も重要なファクターとなっているのだから、オリンピックに働きかけていく必要があるように思える。



NTT
docomo

JOC パートナー

NTTドコモ



経緯

NTT ドコモ様が JOC パートナーである認識はあまりなかったが、GET の OB である佐藤様が NTT ドコモに勤めているということで、佐藤様に連絡をしたところ、快く訪問を受け入れてくれ、訪問することになった。

インタビュー

◆ 当社が JOC パートナーとなった 2004 年当時は、NTT ドコモの事業には i モードを国際化していこうという流れがあった。そのような流れの中、ちょうどアテネオリンピックが重なったため、i モードを世界に PR していくことを目的として JOC のスポンサーになった。

このようなきっかけで JOC パートナーになったわけだが、現在は NTT ドコモのスポンサーとしての役割を国内への社会貢献活動と位置付けている。具体的に言うと、世界の移動体通信事業を行っている企業として、携帯電話の通信の環境を支えることで、日本代表選手を応援しているお客様をバックアップしていくといった活動だ。このような活動を通して、NTT ドコモのスポンサーとしての姿勢をお客様に伝えていきたいと思っている。

◆ 先ほど言ったように、当時は i モードの普及活動をしている頃だった。また、そのころはヨーロッパの数カ国と業務提携をしており、アテネオリンピック前年の 2003 年にギリシャ国内では COSMOTE 社と i モードに関する提携を開始した。

たまたまオリンピックの開催でギリシャが注目され、提供するにいたっただけで、特にオリンピック開催に向けての提供ではなかった。

加えて言えば、オリンピックの開催国企業には、特別オリン

NTT docomo

プロモーション部

イベント担当

河内 みずき 様

国際事業部・販売担当

佐藤 裕介 様

(GET2000 OB)

インタビュアー

担当者 田辺 大介

常安 郁彌

《質問内容》

Q. NTT ドコモ様は 2004 年から JOC のスポンサーをしているが、スポンサーとなったきっかけは何か。

Q. アテネオリンピック開催前に、NTT ドコモ様はギリシャの COSMOTE 社に対して、i モードサービスを展開するために必要なノウハウ、関連技術及び特許などを提供しているが、COSMOTE 社は i モードをアテネオリンピックにおいてどのように利用したのか。

ピックのスポンサーになれる権利があり、COSMOTE 社はスポンサーだった。しかし、ドコモはあくまで JOC のスポンサーであり、COSMOTE 社に i モードライセンスの提供をしたからと言ってギリシャ国内でのプロモーションをするなどの権利はなかった。

しかし、オリンピックのような世界的なイベントは、新たなムーブメントを起こすにはとてもいい機会なので、ギリシャ国内ではオリンピックにからめて、COSMOTE 社の協力のもとさまざまなプロモーションが行われていたのではないかと考えている。

Q. 今回の北京オリンピックで何かムーブメントを起こそうと考えているか。

◆メーカーの場合は、JOC のスポンサー契約をプロモーションとして、製品の販売促進をしていくことができる。ドコモも端末の製造はしているが、事業の中心は端末を通じて、通信機能を利用してもらうことなので、オリンピックで大きな利益を得ようという考えはない。やはり、今回の北京オリンピックについても、何かムーブメントを起こすというよりも、JOC パートナーとして社会貢献をしていけたらと思っている。昨今、携帯業界も飽和状態になってきているが、それでもこれまで以上に良い通信環境や便利なサービスを提供していくことを目標として、そのことによって、選手を応援するお客様のバックアップをしていくというドコモの姿勢をくみとってもらいたいと思っている。

Q. 今回のオリンピックは北京開催なので、日本から観戦に行く人も多いと思うが、これに対して国際サービスの向上など取り組んでいることはあるか。

◆かつては海外で使える携帯電話はレンタルしないと利用でなかったが、現在では携帯電話の端末はそのまま海外でも使えるものが増えてきている。また、プレミアクラブという NTT ドコモの会員サービスでは、GPS の位置情報を利用して、携帯電話を持っている方の周辺のエリア情報であったり、近くの店でつかえるクーポンの配信、現地の天気などを提供することで、便利な情報が常に手に入るような環境を整えている。しかし現在はまだ海外での携帯電話の利用者は伸びている最中である。そこで、さらに国際サービス普及させるために、今年の 4~6 月にドコモのオリジナルTシャツを、今年の 2008 年とかけて 2008 年にプレゼントするキャンペーンを行った。またこのキャンペーンでは、海外から携帯電話を通じて応募すると、当選確率が 5 倍になるという特典を設けた。このことは、国際サービスの利用者への還元と、キャンペーンを知ってもらうことで、国際サービスに対する認知をあげる試みだった。

Q. JOC スポンサーとしての姿勢を顧客にくみ取ってもらうためには、スポンサーであるという認知度を上げる必要があると考える。具体的にそのための活動はしているか。

◆NTT ドコモは、選手を応援している人たちを応援するという姿勢を見せていくことを目的にしていて、あまり華美にスポンサーであることを宣伝していくことは考えていない。オリンピックの前後の期間に集中して、共感いただける内容でお客様に伝えていけたらと思っている。そのために今回は、野口みずき選手をメインキャラクターとしたCMを作成した。北京オリンピックを観戦しに行く人が、携帯を通じて現地で快適に過ごせるように、空港などでも国際サービスについての告知をしている。

Q. NTT ドコモ様がオリンピックの速報、大会情報を提供することは、どのようなメリットとなるのか。

◆一番のメリットはお客様からの信頼を得ることである。最近 NTT ドコモのロゴも変わったので、ここで心機一転し、お客様一人一人に向き合っていく姿勢を見せていきたいし、事業としても発展していきたいと考えている。北京オリンピックはそれを伝えるための手段の一つとして考えている。北京オリンピックの期間に NTT ドコモの携帯電話を通じて大会情報を利用してもらうことで、携帯電話は便利になったと思ってもらうことが、メリットであると思っている。

Q. CMのメインキャラクターとしてマラソンの野口みずき選手を起用した理由はあるか。

◆夏のオリンピックはスポーツジャンルが多く、とても悩んだが、以前にも広告に登場していただいた野口選手にお願いすることとした。オリンピックの選考前の選手は練習や調整などで忙しく邪魔をしたくなかったのだが、野口選手も快諾してくださり、代表の内定後に今回のCMの作成に至った。

Q. 日本卓球協会のオフィシャルパートナーになられたきっかけは何か。

◆きっかけは JOC のスポンサーをしていて、日本卓球協会のオフィシャルパートナーの話が来たことだ。日本国内で卓球の選手権が開催される時期と、NTT ドコモのロゴを変更する時期が重なり、これは新しいロゴを露出させるいい機会だと思い、スポンサーとなった。

また、新しいロゴを伝えるとともに、NTT ドコモがオリンピックを応援していく姿勢や、ロゴとともに経営も改め、信頼される企業を目指していく姿勢といったものをお客様に伝えていけるという考えもあった。

Q. 安定した携帯サービスの提供を強く推しているが、そのことで便利さを認識してもらうことで信頼アップを図るのだろうか。

◆安定したサービスによって、信頼してもらえることは NTT ドコモにとっての一つのメリットであると思うが、目的としては信頼のアップというより、安定したサービスによって携帯を通じて携帯電話を持つ人同士の絆をつないでいこうという気持ち強い。特に今回の北京オリンピックに関して言えば、現地に応援に行けない選手の家族と選手が連絡を取り合うという状況を安定したサービスの提供によって支えるといったことである。

Q. NTT ドコモ様の社員は北京オリンピックの開催地に実際に行くのか。

◆北京現地でホテルを借りて、そこでラウンジを提供し、お客様にそこで休憩していただいたり、現地での携帯電話のトラブルに対応したり、使用法の案内などをしていく。そこで働くスタッフとして、国際サービスに詳しく日ごろから海外からの問い合わせを受けている社員を派遣する。

Q. 今後もスポンサーを続けていくのか。

◆まだ何とも言えないが、北京オリンピックが終わりしだい検討していく。

Q. スポンサー活動は社会的要素が強いということだが、それだけで高いスポンサー料に見合うものになっているのか。

◆例えば JOC のスポンサーだから何となく安心できるというブランドイメージは人間の中に自然と生まれてくるもので、金額に換算できないものもある。よってスポンサー料と社会貢献活動による NTT ドコモへの利益というものは比べるのが難しいですが、現在は社会貢献だけのメリットを十分享受していると考えています。ただし、やはり企業を取り巻く状況が変わってくればスポンサーとしての軸は変わってくることはあると思う。

Q. スポンサーであることをあまり強調しない、縁下の力持ちのような姿勢は、日本人受けがいいと思うが、そこまで考えてのことなのか。

◆企業の事業を理解してもらうことを目的としているので、控え目でもいいと思っている。企業姿勢は伝わる人も伝わらない人もいるが、バランスを見ながら伝えて生きたいと考えている。まったく伝わらないのも問題だが、企業姿勢を強調しすぎてお客様に不快な思いをさせてもお客様とのいい関係を台無しにしてしまうので、そのあたりは意識しているし、これからも気をつけていきたいと思っている。

Q. JOC のスポンサーとしての権利はほかにあるか。

◆権利としては、五輪のマークと企業ロゴを組み合わせた、コンポジットロゴに尽きる。やはりそこからスポンサーとしてのイメージが生まれ、企業にとってのメリットとなってくるのだと思う。

Q. オリンピックツアープレゼントのキャンペーンについて、スポンサーの権利はどう関係するのか。

◆ツアーのプレゼントをすること自体はスポンサーの権利とは関係はないが、キャンペーンを、JOC のスポンサーをしているということを併せて、告知できることがメリットとして挙げられる。しかし、実際のところ JOC のスポンサーとしての認知度アップの効果はあまりないし、このキャンペーンの目的としても、JOC のスポンサーとしての認知度のアップではなく、国際サービスの認知度のアップのほうが大きい。

Q. JOC のスポンサーをしている企業で働いているという意識からの社員のモチベーションのアップはあると思うか。

◆社員に直接聞いたことがないので NTT ドコモの社員がどう感じているかはわからないが、スポンサーの活動自体にはそのような特性はあると思う。私たち自身も、JOC のスポンサーであることにステータス、ないし嬉しさを感じていることはあると思う。



感想・意見

今回はとてもいいお話を伺うことができた。特に NTT ドコモ様のスポンサーとしての役割を社会貢献的活動と位置付けていることはとても印象に残った。メーカーがスポンサーとして商品を販促するのは違い、NTT ドコモ様の場合スポンサーとしてのメリットは単に費用対効果で測れないようなことであるということにもとても考えさせられた。企業によってスポンサーとしての取り組み方が異なるということを実感でき、とても有意義な訪問であったと思う。



衆議院議員 自由民主党 国際局長
「北京オリンピックを支援する議員の会」所属

三原朝彦議員



経緯

GET2009 では今回、一橋大学出身であり現在衆議院議員として活躍されておられ、「北京オリンピックを支援する議員の会」のメンバーである三原朝彦先生の国会事務所を訪問した。GET2009 のグランドテーマ「オリンピックに対する企業の取り組み」に関連したお話を主として伺ったが、その他にも私たちにとって有意義なお話やアドバイスをいただいた。

インタビュー

◆オリンピックは一種の国をあげての「お祭り」だと考えている。オリンピックのボート競技に出たいというのが一橋大学を志望した理由のひとつである。結局大学では柔道をしてしたが、スポーツはいまでもするのを見るのも好きなので、それが入会した理由となっている。変化したことは特にはない。

◆特にはしていない。だがスポーツ義援金を集めることや、文科省に協力していくなどの政治的にサポートが政治家としては主な仕事として入るだろう。

◆オリンピックは近年先進諸国での開催が目立つ。そのようなテイクオフ済みの国でやるのではなく、近年発展途上にある国だからという理由が大きい。そもそもオリンピックは国のプライドを示すものでもある。かつての韓国や日本がそうだ。そして中国もそのような意味合いが強く出ているが、オリンピックという政治には直接的に関与しないという姿勢は評価できる。

国会衆議院 議員会館

三原 朝彦様事務所

衆議院議員

三原 朝彦 様

インタビュアー

担当者 大江 恭平
常安 郁彌
田辺 大介
干場 敦

《質問内容》

Q 北京オリンピックを支援する議員の会に入会した理由とはどのようなものか。また、入会により変化したことはあるか。

Q 北京オリンピックを支援する議員の会の具体的な活動とはどのようなものなのか。

Q なぜ北京五輪を支持しているのか。

Q 北京オリンピックに際してチベット問題が取りざたされたが、日本政府はどう対処していくべきと考えているか。

Q 北京オリンピックによって中国はどのように変化していくと考えているか。

Q 北京オリンピックが日本に与える影響とは、どのようなものと考えているか。

Q 東京都のオリンピック招致についてどう考えているか。

Q オリンピックでは最初の種目の成績が全体の成績に影響するというが、北京では柔道の成績をどのように予想するか。

Q オリンピック以外に何かスポーツを推進する活動を支援しているか。

Q 議員になろうと決意なさった理由、また政治家としての信条を聞かせてほしい。

◆そもそも国家間の国境線はその時々の権力者が線引きをしてきた。人々の故郷や祖国はその時々の権力の動向により変化し、それに伴い犠牲も発生してきた。たとえば、クルド人は2000万人いると言われているが、クルド人の国家というものは存在しない。それから考えるとチベットというのは、言語・宗教文化に中華思想影響が見られ、昔の清との関係も国家間のものではなかった。中国が革命により社会主義国家になった際に毛沢東がマクマホンラインを引いた。これは一種の犠牲ではあるが、これにより中国人もチベットと往来するようになった。これらを省みると、やはりNation Stateの成り立ちというものは複雑かつ難しいものと感じている。チベットの問題は話し合いによる解決が求められる。始めは両者とも譲歩しないであろうが、話し合いに参加しようという姿勢はあるようだから、それを期待している。日本もその仲介役を買って出るべきであろう。

◆中国の格差問題は北京オリンピックでさらに変化していくであろう。だが、オリンピックというひとつの目標に向けて国を挙げてエネルギーをつぎ込むのは当然の流れなのではないか。中国としては国家のプライドを賭けているのだから、その過程で格差がある程度拡大してしまうのは仕方がない。これまでの中国の成長で、集中的投資により利益得た者と、その恩恵を受けられなかった者がいるのであろうが、それがオリンピックをきっかけにして解消されるわけではない。もっとも重要なことは、Basic Humanismを確立していくことである。飢餓の問題や医療・教育についても確固とした対応をしてほしい。

◆500兆のGNPを持つ日本がオリンピックによる経済への直接的な恩恵またはダメージはないであろう。ただ獲得メダル数に関しても当然国民は敏感になるであろうし、国民感情ということに関してはやはりオリンピックは日本人のそれに大きく影響していくだろう。人間は感情の動物であるから、それは当然のことだ。昔からスポーツと政治は別、ということが言われているがこの二つがこれまで深く関係していたということは事実だ。政治にはスポーツはこれからは少なからず関係していくであろう。

◆2016年に東京オリンピックがもし実現したら、自分個人としてはとても喜ばしいことだ。日本で見られることはもう一生無いであろうと考えていた。やはり東京で出来ればそれはうれしい。東京都は施設等に関して既存のものでやるという計画であることも評価できる。ただ、発展の途上にあるブラジルにもやってほしいという思いもある。

◆大学時代柔道をしていた自分にとっても、北京での柔道は興味がある。オリンピックでのメダル獲得数は最初の競技の成績で決まる。それは柔道議連の江村春樹氏もおっしゃっていた。近年、柔道はまるでレスリングのようになってしまっている。日本人の世界柔道議連の理事がいないということもそれに更なる追い討ちをかけている。それはやはり残念なことのように思える。

◆活動と呼べるものは特には行っていないが、やはりスポーツは大好きだ。練習すればするほど上手くなっていくところがいい。

◆留学時代は開発経済を勉強していたのだが、父親の選挙の手伝いのために日本に戻ってきたら、父が大臣になってしまい、自分は秘書官になったのが直接のきっかけだろう。ただその時に開発問題に取り組む政治家になろうと決意したし、それは今でも変わらない。

◆全共闘による一橋封鎖が記憶によく残っている。自分の父親は自民党議

Q 一橋大学の学生時代で記憶に残っている出来事はあるか。

員であったので、よく批判されたことを覚えている。あれは一種の「はしか」のようなものであったのではないだろうか。物事に批判精神を持つべきではあるが、革命でないのなら、暴力に訴えるべきではないのではないだろう。成熟した社会のデモクラシーとはあのようなものではない。議論の中で自分の意見を通さなければいけない場面というものは多々あるものだ。しかし、全共闘は正しかったこととは思えないし、あの運動は何も生まなかった。

その全共闘の時、一人の大学の先生が団体交渉を求められたときの対応が鮮明に思いだされる。この先生はすぐ逃げてしまったのだが、その時人間は知識だけで評価してはいけないと実感した。これは自分にとっては大きな出来事であったように思える。

Q 一橋大学の学生時代に最も力を入れていたこととは、どのような活動か。

◆やはり柔道ではないだろうか。いま思えば語学もしっかりとやっておけばよかったと思う。君たちも語学は重要だからしっかりとやっていくといいのではないか。

Q 一橋大学卒業後は米国とカナダの大学・大学院に留学していらっしゃいますが、留学を決意した理由及びなぜ留学先の選考理由は何であったのか。

◆大学で勉強をしっかりとしなかつたので、外国語で物を考え勉強することにチャレンジしてみたかったというのが大きいであろう。

大学時代は柔道と週刊誌を読むことしかしていなかったので、最初アメリカに1年間語学のブラッシュアップを目的に留学した。

その後、南北問題を勉強したくなり、コーネル大学を目指したが、一橋時代の優の数が少なかったので断念してしまった。

そこでカナダのカールトン1年間のクオリファイとして留学した。

Q その留学先で学んだことが今までの議員としての仕事にどう役立っているか。

◆南北問題を学んだことはやはり今の自分の活動に大きく影響を及ぼしているし、また役立っているだろう。今は発展途上国支援関係の仕事をよくしているが、このきっかけのひとつとして、留学時代に開発経済学を学んだことが挙げられる。

Q 留学時、アフリカやアジア諸国を旅行しておられたそうですが、その経験は議員としての仕事にどう役立っているか。

◆自分は留学中に開発経済学を勉強していたため、アフリカを旅した。この経験は自分の政治家としての原点とも言えるであろう。例えば旅行中にマラリアにかかったことも大きな思い出の1つでもあるのだが、このような経験があるからこそ落選しても頑張れるのではないだろうか。また、政治家としてアフリカになにができるのかということ、日本の利益も視野に入れつつ今活動している。このような経験は20代の時しか出来なかったであろうものだから、大きな財産であると考えている。

感想・意見

国会議員という普段身近ではない立場の方からお話を伺えたことは私たちにとってとても貴重なものであり、充実したインタビューとなった。三原先生には今回、我々の研究テーマのみならず大学時代のお話等も伺ったが、これも我々大学生にとっては、とても参考になる興味深いお話であった。最後に今回私たちの急なお願いにもかかわらず、対応してくださった三原朝彦様はじめ、関係者の方々に感謝したい。



東京オリンピック 招致委員会



経緯

オリンピックを東京に招致することに関して、環境や税金の面から否定的な考え方を持つ人は多い。その意見は、本当に正しいのか。実際にはどのようなになっているのか。ホントのトコロを知るために私達は招致活動に関する行政側の責任者、東京オリンピック招致委員会を訪問し、インタビューすることとなった。

インタビュー

◆長様からのオリンピックに関する話

・オリンピックの経済効果

2016年に東京にオリンピックを招致することで2兆8000億の経済波及効果を見込んでいる。オリンピックはそれ自体大きな公共事業であり、インフラ整備などが伴う。

・なぜ東京にオリンピックを招致するのか？

2016年の東京オリンピックは「大都市の中心で行う初めてのオリンピック」というテーマを掲げて招致活動を行っている。

・環境対策として考えていること

もともとオリンピックなどは環境に悪い。今回の東京オリンピックで、私たちはマイナスカーボンにすることを公約した。つまり140万トンのカーボンを減らすことだ。環境対策として出来ることは何点かある。一つ目は、企業の環境対策技術の促進である。二点目は、オリンピックを行う際のエネルギーを削減することである。三点目は、パブリックデザインを採用することである。副都心線の渋谷駅ではもう行われていることではあるが、自然の光を利用するようなデザインにすることだ。オリンピックは発信効果が大である。日本はもともと高効率技術、省エネ技術などで優れている。そこから発展させ、ビル自体がエネルギーを使わないというコンセプトを得る。自然エネルギーの積極使用が大事である。

東京オリンピック 招致委員会

東京オリンピック・パラ
リンピック招致本部

招致推進部 副参事

長 伸彦 様

主事

鈴木 恵美 様

インタビューー

担当者 常安 郁彌

大江 恭平

石田 賢慈

澤田 雄

田辺 大介

岡田 和美

武井 みなみ

Q なぜ 2016 年に招致している東京オリンピックは世論の支持が得られないのか。

◆その理由としては、都の示している態度が挙げられる。オリンピックに関してもそのほかの問題に関しても都民に対して高圧的な態度をとってはいは都民の同意が得られるはずがない。もう少し、発言を考えるべきである。たとえ自分たちが一番の候補地であっても、それを口にしてはいけない。1964 年の東京オリンピックによって東京は都市化を遂げた。今回のオリンピックでは環境と共存する都市としての再生を目指している。センターコアだけ大切にしているといわれなようにしたい。

Q 2016 年の東京オリンピックの招致に失敗するリスクについてどう考えるか。

◆150 億円が招致費用である。冷静に各国との違いを考えた場合に技術的な面では負ける理由がない。都市としてもファンダメンタルが高いからである。マドリード・シカゴなどと比較した場合にもオリンピックに対する技術という面でかなり勝っている。確かに、リオデジャネイロでオリンピックを実施した場合の経済波及効果が一番大きくなると考えられる。しかし、現在のリオデジャネイロの 33 パーセントはスラム街で構成されている。また、街中で銃撃戦があるなど治安という観点からみたとときに必ずしも開催地として適切とは言うことができない。

しかし、もちろん批判もある。招致費用で、広告・宣伝などを行う。都民の税金を使用しているので都は行政と福祉にだけ力を注げばいいのだという意見もある。税金をかけるということとはんでもないことを仕掛けていかないといけないのだと思う。

Q これから都民の支持を得るためにどのようなことをしていくつもりか。

◆都は、2016 年に東京にどのようなオリンピックを開催したいかを明記したコンセプトブックを発行する。それを都民に読んでもらい世論の支持を集めたい。また、機会をとらえてきっちり自分たちの意見を言って、批判も素直に受け止め、反映させなくてはならない。

また、環境 NGO 団体（グリーンピースなど）とも都のほうから積極的に話し合うことによって支持されるように努力していきたい。

Q オリンピックとメディアの関係についてどのように考えるか。

◆オリンピックはもうすでにかなり商業化されてしまっている。IOC はマーク、ロゴを売って商売をしている。さまざまなコードが実に複雑である。マークを使いたかったら、何億か払ってスポンサーになれということである。どこまでが許容範囲であるのかがまだ完全につかめない。商業化の中でも特に顕著なのが IOC の放映権の問題である。どこかの団体がオリンピック競技を放送しようとしても IOC に莫大な金を払わなければ放送することが出来ない。これはオリンピックに関する放送をすべて取り仕切るトンネル会社、OBS（OBC）が統括しているからである。公式写真の使用もお金がすごくかかる。だからパンフレットを作るとものすごくお金がかかる。特に放映権の売買や商業化の傾向はロサンゼルスオリンピックのころから高まった。UOC のピーターリベロスが始めた。このような状況に対する問題点もある。オリンピックを開催するに当たって放映権料なども含めて莫大な金がかかるので先進国で開催される可能性が高まってしまいかもしれない。1924 年のベルリン大会後の予定地であった日本の当時の JOC 委員、嘉納治五郎は東京オリンピックを質素にやると発言していた。もちろん今回もお金をたくさんつぎ込むことはしない。仮施設をできるだけ減らしていくつもりである。しかし、各競技の国際団体から 1 競技 1 新施設を要求されたりす

る。そんなことをしていればいくらお金があっても足りない。交渉を通して、バランスを保っていくしかない。ただ、完全に質素にできるわけではなくオリンピックはすでに商業化しており、それにのっとってやっていくしかない。

また、オリンピックとメディアの関係としてはベルリンオリンピックがあげられる。ベルリンオリンピックでは、スポーツ科学者のカール・ディウムの発案でアテネからベルリンまでの間の聖火リレーを開始した。記録映画が作られたのはこのときからである。

Q 選手の強化などにもっと金をかけて欲しい。

◆オリンピックに出る選手の養成に関しては JOC がおもに担当している。また、今のところでは国際オリンピック基金が 200 億円を積み立てしている。各競技の施設が個別にあったところ中央センターを新設して、新たに選手への科学的サポートを担う施設を作った。このような施設の東京都版を作っていきたい。

また、東京都としては東京出身の選手を多く出すことによってアピールしていきたい。

しかし、一番大きな問題点はよい指導者を準備することである。副コーチなどなら、経験をつむことによって教え方などが徐々に上達していく。しかし、監督に関してはそのようなことがない。よい監督は最初からよい監督であり悪い監督は最初から悪い監督で改善されることはあまりない。そのため、よい監督に恵まれることが強い選手を作るためには必要である。

Q IOC は 2016 年のオリンピックにどのような評価を下しているのか。

◆IOC が発表している評価としては以下のような順序となっている。

- 一位 東京
- 二位 マドリード
- 三位 シカゴ
- 四位 リオデジャネイロ

リオデジャネイロに関してはやはり治安上の理由から低い評価になってしまっている。東京は、インフラが出来ているために非常に有利な立場に立っている。以前に東京オリンピックも開催され改修工事を行えばいいだけなのでコストも抑えることが出来る。その一方、世論の支持が得られていないという点では問題点も残っている。

IOC 側はもし、オリンピックを行い損失が出た場合には政府が財政保証をすればよいと考えているが日本においては憲法の規制があるためそのようなことは決して出来ない。そのような状況になってしまう原因としては IOC の委員会の中にヨーロッパの人が多く含まれているためである。ヨーロッパの人が自らの経験から判断して交渉してくるからである。

Q オリンピック後の対策としてどのようなことを考えているか。

◆オリンピックが終わった後でも有効利用できるような建設することを第一の目的にしている。しかしオリンピックはどうしても観客収容人数が多いため競技場の観客席だけを増やさなければいけない場合などもある。競技ごとにIOCの基準もあるので大変である。また、一番問題なのは日本では人気がないが海外では人気のあるオリンピック種目のスタジアムなどの建設だ。オリンピック種目である限り会場を建設しなければいけない。だから、オリンピックが終わった後には他の競技に転用可能なように建設する必要がある。

また、仮設の建物は極力減らすように努力をしている。現在、NPOの東京オリンピック委員会を立ち上げ活動している。都の活動だとどうしても制限がかかるので、NPOを立ち上げた。この中にオリンピック学生NGOなどがある。



感想・意見

今回の訪問を通してオリンピック招致の大変さを知った。広告・テレビ様々な媒体を使ってオリンピックを必死に招致使用とする姿を見て、私たち都民ももっとオリンピックについて知らなくてはならないと改めて感じるようになった。

ただ、やはり成功した場合のみを想定して活動を行っているため、失敗したときの対策などももう少し伺いたかった。

JOC (日本オリンピック 委員会)



経緯

私たちが今年のテーマを『オリンピックに対する企業の取り組み』と設定した当初から、日本におけるオリンピックの最高機関であるJOCへの訪問を希望していた。そこでGETの顧問である太田浩准教授の紹介で、東洋大学の藤野文雄先生とお会いした。藤野先生はJOCと深い関わりを持っており、また私たちの活動やテーマに興味を持ってくださり、JOCの渉外部長である大山哲夫さんを私たちに紹介してくださいました。

大山さんも私たちの活動に興味を持ってくださり、より多くの学生と交流したいとおっしゃっていただき、わざわざ私たちの普段のミーティングの時間に国立までお越しいただいた。大山さんからテーマに関して多くの資料をいただき、またJOCの見解と大山様個人の見解を率直に教えていただいた。私たちの質問にも答えていただき、本当に貴重な体験をさせていただいたと思う。大山さんのお話によりオリンピックに対する理解と私たちのテーマは深まったと思う。

インタビュー

11月14日に財団法人日本オリンピック委員会、渉外部長の大山哲夫さんが一橋大学にお越しくださいました。まず、大山さんから私たちのテーマに関する次の3点についてご説明いただき、そのあとで私たちの質問に直接お答えしていただいた。

- 1、IOCとはどういう組織なのか。
- 2、なぜ五輪にマーケティングが必要なのか。そして、マーケティングとはどのようなものか。
- 3、五輪の放映権について

【以下 インタビュー内容】

◆まずオリンピック憲章緒言に書かれているように、IOCはオリンピックムーブメントの主要構成要素の1つとして存在しております。ちなみに他の主要構成要素にNOC(国内(地域)オリンピック委員会、National Olympic Committees)とIF(国際競技連盟、International Federations)があります。IOCは1894年に「近代オリンピックを始めましょう」という提言のもと始まり、オリンピックの開催や運営に取り組んだのです。まずIOCの理事会メンバーについて説明します。(メンバーリストが配布された)見て分かるようにメンバーの半数近くがヨーロッパ出身の人間で占められていますが、

財団法人

日本オリンピック委員会

渉外部長

ナショナルトレーニング
センター事務所所長代理
大山 哲夫 さん

インタビュアー

担当者	常安 郁彌
	石田 賢慈
	大江 恭平
	岡田 和美
	澤田 雄
	清水 洋平
	武井 みなみ
文章作成	田尻 佑介
	田辺 大介

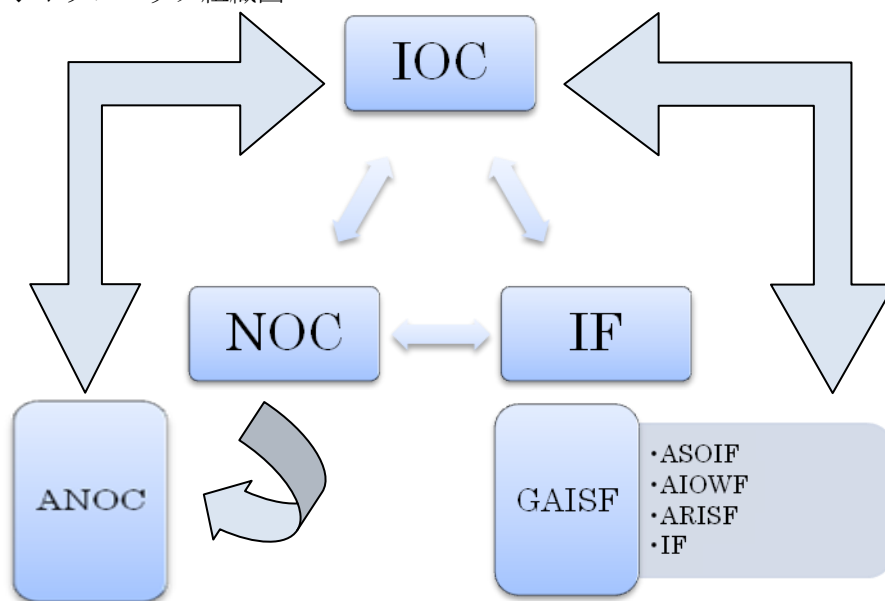
《質問内容》

Q IOCとはどういう組織なのか。

これは元々IOCメンバーとはIOCが自ら選んで本部ローザンヌから発信する外交官を意味しているからです。かつては、オリンピックが開催された都市から1名選出しても良いという方式も採られていましたが、その枠がなくなりました。それから自薦、他薦はあるもののオリンピックに貢献できるような人をIOCが選ぶという方式が採用されることとなります。

また、IOCメンバーによって構成されている委員会として、IOCコミッションが存在しており、オリンピックの運営に大きく関わっています。IOCメンバーはどれか一つの委員会に属さなければなりません。(Athletes, Ethics, Marketing, TV Rights and New Media 等々)

◆オリンピック組織図



- ※ANOC *Association of National Olympic Committees*
国内オリンピック委員会連合：IOCが承認していない13のNOCを含め全てのNOCはANOCの構成メンバーとなっている。
- ※ASOIF *Association of Summer Olympic International Federations*
オリンピック夏季大会競技団体連合
- ※AIOWF *The Association of International Olympic Winter Sports Federations*
オリンピック冬季大会競技団体連合
- ※ARISF *The Association of Recognized IOC International Sports Federations*
IOC承認国際競技団体連合
- ※GAISF *General Association of International Sports Federations*
国際競技団体連合：上記に属さないIF(国際競技連盟)を取りまとめる

Q なぜ五輪にマーケティングが必要なのか、そして、マーケティングとはどのようなものか。

◆IOCは始めに述べたように「近代オリンピックをはじめましょう。」からボランティアとしてスタートしたので、当初何の財源もない状態でした。IOCとは元々スイスのVAUD州の州法で作られた民間のスポーツ団体なのです。すなわち友好団体なのです。よく間違えられることなのですがIOCというのは例えば国連のように国際役人ではないのです。ですからIOCにおいて情報を交換することは可能ですし、法に触れることでもないのです。財源がないということを言えば、IOC自体は寄付金などで運営され、IOCメンバーはかつてオリンピックに行くのも宿泊するのも全て自費で賄っていました。IOCのメンバーに王室関係、貴族が多かったのです。なんとかやっていたのですが。

*第6代 JOC 会長のキラニン卿が在任中(1972~1980 年)にオリンピック憲章から『アマチュア』の文字を消した。本文中の構想とはマーケティングの構想であり、これは複数の人々によって IOC で討議されているが実践したのが第7代 IOC 会長のサマランチ氏。

ゆえにモスクワ五輪まで開催都市は赤字状態でした。それでもなお「国の威信をかけて」という思いによって五輪は開催されてきました。しかしながら、やはり財源がないことをどうにかしなくてはならなくなり、1984年のロス五輪の時にピーター・ユベロス氏(当時の組織委員会会長)が中心となって**五輪のマークをブランド化し、放映権を売る**ことにしました。このようにして五輪をブランドにすることで数10億の収益を得ました。これが五輪のマーケティングのはじまりです。

こうしてサマランチ会長時代になると五輪のマーケティングはさらに本格的になります。サマランチ会長はすでに構想*としてあった五輪マーケティングを具現化した人でした。もともと商才のあった人です。マーケティングに踏み切った背後には五輪を世界最強のスポーツの祭典にしようという動きがありました。それはできるだけたくさんの人に五輪を見てもらいたいという思いが内にひめられおり、世界最強ならアマもプロも関係ないということで、アマチュアだけの参加ということは消えてしまいます。ここに至るまで、もちろんアマチュアリズムを擁護し最後までアマチュアリズムを通すべきだと主張する人もいました。IFの考えで現在もアマしか出場させないところもあります。

現在のオリンピックマーケティングは五輪マークのブランドと放映権の二つが大きな柱となっています。他にはライセンスというオリンピック公式商品の販売などもあります。マーケティングにより集めたお金の92%(約3680億円)はNOC、IF、OCOG(オリンピック組織委員会 Organizing Committee of Olympic Games)に配分されます。残りの8%(約320億円)をIOCが使います。

企業はオリンピックマーケティングに関心を持った、と言った方が適切でしょう。かつての社会主義の国では国家が最大のスポンサーでした。それもIOCがマーケティングに踏み切る一因なのですが、現在は企業がオリンピックというブランドに飛びつき、需要と供給の関係が成り立ち、互いにもちつもたれつだと思えます。企業は30~50億ものスポンサー料を実際に払いオリンピックというブランドを買うのです。アマチュアリズムやマーケティングがいいのか悪いのかは皆さんが決める問題だと思えます。IOCはそういう戦略を取らざるを得なかったのです。

Q 五輪の放映権について

◆放映権料に関していえば、オリンピック観戦が好きな国ほど高値で支払われています。アメリカでは2008年北京五輪に893000000ドルもの放映権料を払っています。日本もNHKと民放が共同で180000000ドル支払っています。各国でテレビ局同士による争いもありますが、巨額の契約なので常に交渉が必要になります。

Q 日本のNOCであるJOCはオリンピック教育に関して何か具体的に行っていますか。

◆JOCは何もやっていません。IOA(国際オリンピックアカデミー)という組織の日本のNOA(日本オリンピックアカデミー)がそのような活動を担当しております。オリンピズムとは世界平和、世界平等ということを通じて体得するものであり、日本の教科書にもオリンピックやオリンピズムのことを載せて欲しいと要求していますが、なかなか実現しません。私(大山様)個人の意見としては、世界平和運動といえども世界中にいくらでもあり、オリンピックはそのOne of them にすぎないし、『~イズム』というところどこか宗教的に見え、そこを国が嫌っているのではないかと思います。

Q オリンピックムーブメント、ひいては日本国民のオリンピックへの関心を高めるためにJOCはどのような活動をしていますか。

◆今回の東京招致で国民の支持が得られていないことはよく言われます。JOCとしては年間3、4億円かけてオリンピックディラン、オリンピックコンサート、各種刊行物などを通じた活動をしています。

Q JOC ではオリンピックムーブメントの普及活動の一環として、毎年コンサートや全国規模のマラソン大会をおこなっていただけますが、これらの活動には実際には具体的にどのような効果がありますか。

Q JOC にはスポーツ環境専門委員会意外に、国際的イニシアチブを取っている委員会は他にありますか。

Q オリンピズムという崇高な思想から出発した近代オリンピックですが、このオリンピックの望ましい未来像を JOC はどのようにお考えですか。

Q IOC 委員への金品などの供与、委員の家族などへの留学斡旋などの問題が取りざたされていましたが、そのようなことを防ぐためどのような対策を行っていますか。

Q 北京五輪では、開催地の環境の悪さが注目されましたが、実際にはオリンピックの開催中に環境問題が取り上げられることがなかったように思います。選手やスタッフからこの件に関するネガティブなコメントや意見はありましたか。

Q 今後インフラや競技会場の整った先進国や過去に開催した経験のある都市での開催が多くなっていくのでしょうか。未だ大会の開かれていないアフリカ大陸での開催は難しいのでしょうか。またオリンピックが商業化するに伴い開催国の利害が重視され、先進国ばかりが開催地に選ばれる可能性が増えるのではないのでしょうか。

Q JOC は東京招致活動に関して具体的にはどの程度の関与または支援をしているのでしょうか。また、JOC の仲介のもとでどのように中央政府と東京都とが連携しているのでしょうか。

◆オリンピックフェスティバルではオリンピック選手と実際に触れ合えるということで体育の日にたくさんの方に集まっていただきました。私どもとしては効果があったのではないかと考えています。

◆基本的にありません。環境問題のことは JOC 副会長、かつスポーツ用品メーカーのミズノの会長である水野正人さんが積極的に行っており ISO14001 の認証登録も水野さんのおかげです。環境問題の活動は徐々に認知されつつあります。

◆崇高な思想かどうかは考える人によると思います。未来像は正直わかりません。ただし、商業化は必然的であったと言えます。

◆そういうことは実際にありました。私もその場面を見たことがあります。一時期、オリンピック誘致活動に関してあまりにも露骨な留学斡旋や金品贈与などがあったので、倫理的におかしいということで今ではそういう活動を厳しく取り締まる委員会が IOC に設けられました。役人ではないのでそういった行為が直接法に触れることはありませんが、今では調査委員会などが入り、客観的判断が厳しく下されるようになりました。これは IOC の活動なので JOC もこの判断基準に従っています。

◆出場辞退をする選手というのもしましたが、実際のところは本当に環境が問題で辞退したのかどうかはわかりません。私もマスク持参で北京に行きましたが、見事に晴れていました。雨のコントロールということもあったのではないかと思います。

◆そうです。今後も先進国首都の開催に偏っていくのではないかと考えています。それはいいことではありませんが、先進国首都ならば収入が大きいのです。ある種の板挟みです。オリンピックと環境問題は不可分です。新しくコースや会場を作るとなるとどうしても問題が生じます。夏期五輪では会場の整備、冬季では森林伐採が必要になります。これらは商業化とともに考えられますが、アフリカや南米での開催というのは今後も難しくなっていくのではないかと考えています。

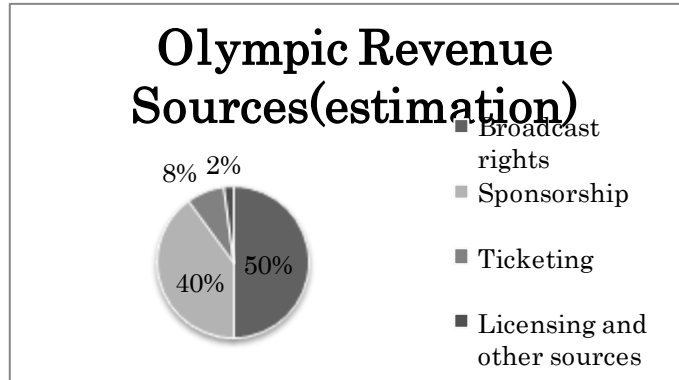
Q オリンピックの開催をきっかけとして様々な変化が当該国にもたらされると思います。そこで、2016年に東京オリンピックが実現された際にどのような変化が訪れるとお考えですか。

Q 今回の北京オリンピックではアメリカのNBCが2002年からIOCと交渉をしてアメリカで人気の競技の決勝の開催時間を現地の午前を設定し、アメリカのゴールデンタイムに中継できるようにしたとニュースで拝見しました。商業化の中でメディアとオリンピックの関係(放映権料)が問題になってきていますが、JOCとしてはどのようなお考えをお持ちですか。

Q オリンピックはアマチュアリズムの祭典として出発しましたが、段々と世界一を決める祭典へ移行していき、アマチュアリズムを放棄してきたように見受けられます。スポンサーを背負ったプロ選手が競技に参加することで商業化は免れなかったとは思いますがオリンピックの商業化は現在では暗黙の了解となっているのでしょうか、商業化へ疑問が投げかけられるということはもうないのでしょうか。

◆2016年の東京招致はコンパクトオリンピックを掲げており、これ自体素晴らしい構想だと思います。オリンピックを日本に、というのはスポーツと国策の合致したものです。国策といっても一つのツールとしてですが。

◆実際、そのようなことはありました。そのこと自体に良し悪しはありません。しかし、放映権料は問題にはなっていません。それぞれテレビ会社は進んで払ってくるので。



◆アマチュアリズムから脱皮したという方が適切だと思います。商業化というのは暗黙の了解ではなく、必然であったということです。

なお、以上の回答は、私(大山さん)個人の見解ですので、必ずしもJOCやIOCの意見を代表するものではありません。

Olympic Games	Broadcast Revenue(US \$)
Rome 1960	1.2million
Munich 1972	17.8million
Los Angeles 1984	286.9million
Atlanta 1996	898.3million
Beijing 2008	1737million(estimate to data)

感想・意見

今回は大山さんにはわざわざお忙しい中、国立にお越しいただき、オリンピックの商業化、オリンピックと企業との関係を熱心に教えていただいた。大山さんは様々な私たちの質問に対して率直にお答えいただき、ミーティング後にはメンバー一同貴重なお話が聞けてテーマが深まったと言っていた。以下にインタビューをまとめる。

◆IOCという組織がスイスの州法による民間団体であり、公的国際組織、国際役人ではないということ。よって商売の話が活動中にあったとしても裁かれるものではない。

◆商業化は必然であったということ。商業化に至る歴史を振り返らなければならない。世界最強のスポーツの祭典、より多くの人のオリンピックへと変わるためには商業化は必須であった。

◆企業はオリンピックに巻き込まれたということ。企業はオリンピックのブランド化にチャンスを見出した。需要と供給が一致したということ。

◆未だ多くの改善点を持っていること。大山さんも後日「現状のオリンピ

